

第11報 内面化をねらった生徒の管理・指導

要 旨

発展的目標をもった生徒の管理・指導の第3年目としてその内面化をねらい、H・Rにおける個人より小集団への育成、生徒会活動を中心とした大集団および、両者を結ぶ各種中集団活動の深化、さらに、それらの全体の触媒となる学校に対する「誇り」を追究。

I. はじめに

本校では、今から約10年ほど前から、それまでの遊覧船ムードから駆逐艦的に、という校風改善への努力が始められた。その過程は、本校の紀要その他に逐年報告されているが、それは創立以来の自由の謳歌が、年代の経過と共にその本質の影が薄れて形骸化し、放縦の比重が急激に増加してきたことへの厳しい反省の結果、生徒指導の合い言葉として打ち出されてきたもので、換言すれば、「枝葉の自由を矯めて、根本の自由を育てよう」とも言うべきものであった。

ところで、この方向への努力は当然のこととして、先づ「枝葉の自由を茂らせた結果、根本の自由が枯れるようなことがあってはならない。遅刻・服装違反・ふしだらなどは十分に抑制する。その反面、生徒の中から出てくる建設的な意見は、たとえそれが不十分なものであっても、どんどん取り入れ、生徒達の創意と活力に乗っかって、校内の気風を改善してゆきたい」といったものであり、その中心となったのは、指導部を中心とする教官と、生徒会執行部であった。

その結果、本校の校風改変は、短期間の中に、尻上りの速度で、かなりな水準に達することができた。しかし、これらの運動も、一応の成果があがり、やや心のゆとりもできて反省期に入ると「根本の自由とは何か」ということの追求から、生徒会の執行部の育成に重点を置くだけでは、当然のことながら、教官の傀儡としての執行部という発想に基づくこの方向への努力に対するブレーキが、一般生徒の中のみでなく、年毎に変わってゆく執行部自体の中からも、折あるごとに、発生してくるようになった。

このことは、実は、枝葉の自由の排除は勿論、根本の自由の追求すらも、あるいは生徒会の執行部や議会の指導場面、あるいはH・Rやクラブでの指導場面で、多分に教官の手が加わることを余儀なくさせられた当時の状況から、次第に生徒側が消極的になり、根本の自由を追究しようという積極的な気魄そのものま

でも衰退していったことに起因するものであって、もっと多面にわたる、根本的な対策研究の必要が痛感されるようになってきた。

II. 研究の経過

このような状況で研究の第1年に入った、われわれの当面の仕事は、「生徒管理・指導の基盤としての、ホームルームの運営」とならざるを得なかったわけであるが、第2年には、その結果に基づき「発展的目標をもった生徒の管理・指導」に研究を進め、H・Rと生徒会の接触ないしは、からみ合いの点に焦点をしばって追究を行なった。

さらに一応整備のできた機械の点検・試運転といったような意味で、生徒の管理・指導の本質的な目標である、その内面化の問題をとり上げてみたいと考え、その手始めとして、一昨年末に「学校に対する誇り」・「伝統」に関する調査を行なった。

ところでこのような調査を、是非試みたいと考えるに至ったのには、次のような事情があるのである。

まず、われわれの社会における小集団の自負が、客観的にその価値を、その小集団が所属する大集団によって認められたとき、それはその大集団の誇りとなり、それが更に幾世代の経過にも堪えてその大集団の中に定着したとき、それは校風とか伝統と呼ばれるものになると考えられる。そしてこの「誇り」や「伝統」が、その集団構成員に対して果す消極的效果としては自作用、さらにまた積極的效果としては、その集団の前向きなグループ・ダイナミクスにおける触媒のような作用が期待できることを考えると、これこそ、行き詰っていた、われわれの校風改変の仕事に、質的転換を与える一つの鍵となりうるものであるということが期待されたからである。ところでこの調査が予想以上の効果を発揮し、生徒指導の現状に対するいわばカンフル注射のような役割りを果すことになったのである。

というのは、昨年一月、この調査結果を生徒にも公表したところ、大変な反響があり、生徒会の第三学期の中心の仕事として、その調査調果を基にして、いろいろ現在の自分達の生活を分析検討することを取り上げることになった。

これに先立ち、数年前から同窓会によって、「学園に緑を」の呼びかけがなされておられそれは、20周年の記念事業として玄関前の庭園の形で昨年の春結実したのであるが、一方在校生による自分達の生活の分析検

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

討はその結果として、同窓会によるこの生物学的な緑もさることながら、各時代の先輩がそれぞれ心の中に育て上げてきた精神的な緑をこそ、この学園の中に生い繁らせなくては、との考えにまで発展し、20周年記念誌編集委員会の誕生というはこびに至ったのである。

以上のように、ある意味では当然のことながら、生徒指導の研究のこまこまが、密接に生徒の新しい動きとからみ合って、発展してきたわれわれの研究であるが、その現在までの結果の主なものを、次にまとめてみたいと思う。

Ⅲ. 研究の結果

(1) H・Rにおける小集団活動の内面化

先ず第一に、望ましい校風を作り上げてゆく基礎をなすのはH・Rにおける一人一人の生徒の個人としての成長と、社会人としての成長にあると考え、H・Rの指導の目標として、次のようなものを考え、それに向って努力してきた。

1. 計画と反省のある生活
2. 自己の能力の追究
3. 広く深い人間関係
4. 責任ある行動と創造の喜び
5. 個人の自由を尊重したH・Rの団結
6. 行動化を抑制した教師の願い

1.については、本校では10年近く夏休みに入る前に実行可能な具体的計画表を各生徒に作成させ、個別に担任教官が指導補正を行い、それについての反省を、休暇後に提出させることを行なって来ているが、生活の節として、その果す役割は決して小さくはない。

この点を更に進めて、本年は、H2BとH1Cの両クラスで、毎学期のはじめ抱負を書かせて担任があぶり、期末にはそれについての反省（ただし担任に提出したものを返して見せることはしないで）を書かせることを試みてきているが、貴重な高校時代を漫然と過ぎせないためだけでも、その効果は大きいようである。結果の詳細は、紙数の制約が大きく、残念ながらここに載せられないが、例えば、第1学期はじめの抱負で、高2Bでは「巾広い生活を」「能力の限界を試みたい」「やり抜く」「自己を失ってまで周囲と妥協はしない」「先生方をもっと利用する」「クラブの気魄を、勉強にも」「テレビの誘惑を断つ」などが、高1には見られぬ、数も多い項目であるのに対し、高1Cでは「趣味をもつ」「社交性を」「健康を大切に」「予習復習を十分に」「英会話をなろう」「英語や数学をしっかり」などが特有の主なもので、その間に大きな人間性成長の違いが見られる。これは、勿論すべ

ての生徒がそうというわけではないので、単に資料として留めたのでは勿体ないので、統計結果は、生徒にフィードバックし、反省の資料にさせている。そのようにして、第1学期末に、両クラスについて、反省の一文を書かせて、学期始めに書いたものつき合わせてみると、次のような結果が得られた。

	[H2B]	[H1C]
計画した事は忘れず、かなりの程度達成。	2	0
計画した事は忘れていないが不十分	38	15
計画した事の一部も忘却	7	27
計画した事が何だったか不詳	2	7

この点でも大きな差が見られた。然し高2Bの第1学期末の抱負の中に現われた。高1時代について果し得なかった事項について、高1全員に第1学期末に反省させ、これらの事項は、うつかりしていると他人事でないと思うものを選ばせた結果を見ると、高1CはA、B組に比し、かなり多くの事項を、あげており、この結果は、他の要素も勿論相当に作用はしているものの、計画と反省のある生活を意識的に実践させていることの一つの効果とも考えてよいと思う。さらに、この面については、毎週のL・Tについても、十分な計画と、実施後の反省、特に討論などは、し放しではなく、担当グループが要点を整理してプリントにし、配布するなどの方法で浸透させることを心がけさせていることも付記しておきたい。

2.については、上記の調査にも現れたように、高2では、かなり多くの生徒（約2割近く）がはっきりと生活目標としてあげている程であり、高校3年間の人間的成長の流れから見ても、極めて望ましいものであり、それを意識していない者には、積極的に意識し、試みる勇気を持たせることが、生徒一人一人の人間としての生涯のスケールを決定する上で極めて肝要なことと思う。

3.4.5.については、後の第12報に、佐藤教官が詳細に触れているのでここには割愛する。

6.については、教師としての欲やあせりから、われわれは、つい生徒に先廻っては、方向を与え、結果的には生徒に無駄をさせなすぎることになり勝ちであるが、10年ばかり管理関係の校務ばかり分担して、H・Rの担任としての空白があった筆者はその間に年令的にも生徒が兄貴分としては認めてくれなく、否応なしに親父的立場に立たざるを得なくなったの実感であるが、H・RのL・Tなどで、こちらで発言したくうずうずしている時に、「でも生徒のうちの誰かが、言ってくれるかもしれないから」と考えて自己を抑制していると、十中八九までは必らずそうなり、しかも、その結果は、われわれ教師自身が、発言した場合より、

はるかに効果的であることが、圧倒的に多い。これは、筆者の十年前についても、もしこのような構えを、もう少し身につけておれば、一層労少くして効果は上ったであろうと反省させられる場面が思い出されることもあって、生徒指導の要として、考える必要があるように思う。

(2) 生徒会の学校行事への積極的参加を中心とした大集団としての活動の内面化

既述の20周年記念誌編集委員会の誕生をきっかけに、生徒会を中心とした、学校行事への積極的参加の気運が次第に盛り上げられてきた。その主なものは、

1. 20周年記念誌編集委員会

学校で発行する正史的なものとは別に、創立以来の、生徒達の生の姿を中心に、過去の資料・現在の分析、未来へのヴィジョンの三部構成で編集を計画。進行中。

2. 20周年を期し定期戦（金大付高との）の戦績を対にとのアピール

本年で第10回を迎えた対金大戦は、過去の対戦成績 4:5 で負け越しになっているのを、この機会に各クラブ全力をあげて、5:5 の対の成績にしようとの呼びかけ。白熱的接戦の結果終に所期の目的を達成。

3. 20周年記念行事を生徒の手で

成人を迎えた学校の歴史に対しても、いつまでも先生の計画におんぶしっ放しでなく、生徒の手でやろうではないか、とのアピール。

などである。

特にその根底にあるべきものとして強調しておきたいことは、生徒会の手によるこれらの運営とは「決して教師が単に指導を放棄したような形で行なわれるような低次元のものではなく、教官会議の積極的支持が得られ、しかも名実共に生徒の手によると言いうるようなものでなくてはならない。そしてこのような成案に到達するまでは、二案も三案も案出してゆく気力と、ねばりに対する自信がないならば大きな口を利くものではない」というわれわれの指導の基本的な態度である。

これについての、一つの評価の資料として、右の表を見て頂ければ、幸いである。即ち表に現われた、教官側の評価と、生徒側の評価の傾向は極めて大きな一致の傾向を示し、多少の差のあるところも、厳しい評価を下しているのは、むしろ生徒側であるということである。

(3) 各種中集団活動を通しての小集団で獲得したものの、大集団への転移の促進。

上記の(1)および(2)の間には、集団自体の規模の大き

な相異から、質的転換が起っており、(1)で身につけることができたものが、そのままでは容易に(2)には転移できぬ場合が少くない。その意味で、この両群を関連づけるような場面の設定は、極めて重要なものとなってくる。本校におけるこの種中集団活動の主なものを紹介すると、

1. クラブ活動
 2. 室長会議
 3. 拡大H・RによるL・T
 4. 掲示活動
 5. 高1の山の生活
 6. 大和古跡研究旅行
- などである。

学園祭の反省

項 目	評価	生徒 (255名)	教官 (23名)
学園祭全体として	○	57	2
	△	95●	14●
	×	103	7
学園祭のうち文化祭は	○	42	1
	△	60	15●
	×	153□	7
学園祭のうち体育大会は	○	126◎	6◎
	△	59	15
	×	70	2
学園祭のうち生徒祭は	○	44	3
	△	64	7
	×	147□	13□
生徒祭の昼食会は	○	90◎	2●
	△	90	16
	×	75	5
生徒祭の映画会は	○	52	0●
	△	77●	18●
	×	126	5
生徒祭のクラブ別 合唱コンクールは	○	115◎	4◎
	△	72	17
	×	68	2
体育大会と文化祭は例年のように切り離れた方がよかったか	Yes	144◎	17◎
	△	34	0
	No	77	6

(注) $\left\{ \begin{array}{l} \textcircled{\bullet} : \textcircled{\circ} \text{数} + \frac{\triangle \text{数}}{2} > \frac{\triangle \text{数}}{2} + \times \text{数} \\ \bullet : \textcircled{\circ} \text{数} + \triangle \text{数} > \times \text{数} \\ \square : \textcircled{\circ} \text{数} + \triangle \text{数} < \times \text{数} \end{array} \right.$

1.については第14報に原田教官が、2.4.については第13報に盛田教官が、また3.については第12報に佐藤教官が、それぞれ詳しく述べているし、また5.6.については、いずれも10年近く前から設けられた本校独自の構想に基づく行事であり、十分な資料の集積と、

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

そのフィードバックによる運営の改善も行なわれてきているので、近く、稿を新にして、本紀要に発表されるはずであるから、そちらにゆずりたいと思うが、それぞれ概略を紹介すると、

1. クラブ活動：超学年の場として、1人1クラブを原則とし、文化系は週2日以上、体育は週3日以上以上の活動を約束。なお昨年度クラブ不適応者の収容場所として発足した技術クラブが、技術的奉仕活動の経験を通して本年度は自発的にクラブ員となった者も何人か出てきて、好ましい変質が起ろうとしていることも特記すべきことと思う。
2. 室長会議：H・R活動の直接の責任者と、指導部とのパイプとしての機能をねらって昨年から発足。本年はその活動の活発化と共に、議長・書記は生徒の輪番制となり、執行部代表も正式の成員として加わるなど、好ましい成長を示している。
3. 拡大H・RによるL・T：同学年間で。また同学年全体で、学校長あるいは、希望する教官との話し合いなど。
4. 掲示活動：H・R活動の成果の、全校への公開による質の向上、充実した文化祭を生み出す潜在力の形成などをねらって。一学年3H・Rが、三つの掲示板にそれぞれ、共通のテーマ（3H・Rの話し合いで決める）に対し、独自の角度で調査・研究・創作などを行ない、その結果を1か月間掲示。
5. 高1の山の生活：10年来木曾駒において、全員参加の形で、3泊4日。
6. 高2の大和古跡研究旅行：国社美について7つの研究領域を設け、各H・R7グループに分れ研究。飛鳥・西の京・吉野・平城京を2泊3日のバス旅行。バス中でも案内は、生徒が担当。旅館でもその日の感想発表会を行なう。

(4) 「学校に対する誇り」と、「伝統」の内面的把握。

昨年度第7報として報告したように「学校に対する誇り」や「伝統」の内面化は、上述の社会生活を促進し、これに対して触媒的なはたらきをすることが十分に期待されるので、本年度は、この面での仕事として次のような三つのことを計画実施した。

「誇り」をもっている者の根拠

事 項	区 分		本 校				B 校		C 校	
	調 査 形 式		H 1 A	H 1 B・C	H 2	41年 H 1	H 2		H 2	
	Ⓐ	Ⓑ	Ⓑ	Ⓐ	Ⓐ	Ⓑ	Ⓐ	Ⓑ		
本	国立大学付高という名称		5	3	15	20	2		6	

1. 昨年の結果に基づいて作成した多項目からの選択を方法の基本に置いた調査票Ⓔの作成およびそれによる調査を早期に高1に対して実施することにより、新しい環境への積極的適応を促進する触媒のような働きをさせることの可能性の確かめ。
- (2) より多くの優れた選択肢をみつけて、調査票Ⓔの効率を高めるための、昨年度の調査票Ⓐによるいくつかの国立大附高での調査。
- (3) 同じ場面での調査票Ⓐと、調査票Ⓔのはたらきを比較検討するための、上と同じ国立大附高での調査。

以上3つの仕事に関し、具体的には次の調査結果の欄を参照して頂ければ明らかなように、本校高1（Ⓐ型式43名、Ⓔ型式93名）、高2（Ⓔ型式ばかりで144名、これは、昨年度Ⓐ型式で調査済の対象なので対比のために）、さらに比較およびⒺ型式をより充実したものに改良するための新しい選択肢を得る目的で、国立附属高校のB・C二校に御協力を願ひ、B校高2（Ⓐで38名、Ⓔで87名）、C校高2（Ⓐで50名、Ⓔで66名）に対して調査の行なった。調査時期は何れも7月。

自分の学校に誇りをもっているといえるか？

事 項	本 校		B 校		C 校			
	H 1 A	H 1 B・C	H 2	41年 H 1	H 2			
	Ⓐ	Ⓑ	Ⓑ	Ⓐ	Ⓐ	Ⓑ		
言える	33	78	90	88	26	59	39	54
言えない (無記入)	10	15	54	56	12	28	10	12
				3			1	
計	43	93	144	147	38	87	50	66

この結果からは、B校の高2ではやや不明確ながら本校の高1やC校の結果に徴して、明らかにⒶ型式よりもⒺ型式による客観調査の方式で意識下にあるものを、意識上にもたらしることができるため、自分は「誇り」を持っていると、言えると判断する者の比率が多くなることは、まず間違いないと言ってよさそうである。このことは、まず、計画の第(1)項が、予想通りであったと結論してよいように思われる。

更にこの「誇り」をもっと言えるとした者の、拠り所を分析してみると、次の表が得られた。

昨 年 度 よ り 出 て い る も の	校 特 有	きびしい面もあるが自由 自主性を重んじている 理想を求めている学校の態度 高い入学の時の競争率 クラブ活動が盛ん	3 1 3	10 6 3 1 9	10 10 4 4 1	13 6 3 3	5 13 4 2		10 18 4 1 2	
	本 校 ・ A 校 共 通	立派な個性的な先生が多い 生徒間が親密・すばらしい仲間 よい雰囲気 予備校化していない高校らしい高校 先生と生徒の間が親密 環境がよい 自分の入っている学校だから 設備がよい 少数定員校で、人間的な指導が行なわれている 悪質な生徒がいない レベルが高い 生徒の割りに多い先生 先輩の社会における充実した活動	3 2 1 1 6 4 4 2 2	9 14 15 14 4 21 10 9 9 3 6 1	9 18 15 14 7 19 15 10 9 9 6 6	14 13 17 9 11 8 15 10 10 4	7 1 1 2 1 1 11 4 3 2 3 1	7 3 1 4 3 14 2 4 2 3 4 1	10 4 7 1 14 9 6 4 9 8 2 3	
	A 校 特 有	先生の信頼と、それに応える生徒の責任 秀才校、名門 自由であること 自らを以て自らを戒める気風 高い有名大学への進学率 勉強しようという気魄が満ちている 生徒の個性尊重 高校生活を本当に楽しくする学校 古い伝統を、うけついでいる よい生徒が、そろっている 進学中心のようでありながら巾の広い学校 はっきりした自覚をもった生徒が多い まとまりのある学校（少数定員で） 大人物を作る教育 先輩の残した優れた業績 ハイセンス 充実して面白い授業 冬の制服（あこがれの的だった）	2 1 1 1 1 1	2 1 4 3 4 4 2 6 2 3 6 1 9 8 3 2 1 1 5	8 1 6 4 5 12 2 3 8 3 1 1 3	6 8 18 2 6 3 7 2 4 4 1 1 1	3 3 3 2 2 6 3 7 2 4 4 1	14 3 7 1 1 13 9 5 1 9 2 2 1	3 5 10 7 1 6 9 1 8 9 11 9 2 2 1 4	
	本 校 特 有	学校全体に明るい気持ちがあふれている 附高生で、公立高校生とは違うのだという 気持	6 3							
	B 校 特 有	教師がさえている 文部省に制約されない教育 生徒の質がよい いろいろな活動を経験できる機会が与えら れている 長髪許可					3 2 2 1 1			
	C 校 特 有	熱心な先生 ハメを外さぬ一種の気品 学生としての本分を守っている生徒 社会の良識にそった校風 知的雰囲気							4 2 2 1 1	

B. 発展的目標をもった生徒の管理・指導

計	50	208	242	143	49	130	63	210
一人平均	1.5	2.7	2.7	1.6	1.9	2.2	1.6	3.9

このように分析してみると、㊶型式と㊷型式の特徴は、一層はっきりしてくる。まず客観的な㊷型式が、意識下にあるものを、意識上に齊らすというはたらきをもっていることは、3校すべてについて明らかな傾向であり、本校の現高2が、昨年度（高1時代）に示していた「誇り」の有無の殆んど変化ないと言っているのに対し、その根拠としてあがっているのは、昨年の平均1.6から、本年の2.7と、大きく増加していることにも、みごとに示されている。また絶対数のみならず、挙げてある項目の種類㊶型式による場合に比し、㊷型式による方が、はるかに優位にあることも、以上のすべての場合に、共通に言いうることである。この事実は、明らかに、㊷型式による調査が、現に実在する美点を意識できない者に意識させ、また漠然と感覚的にしかわかっていない者に、判然とした言語表現を与え、それ以後の生活に、少なくともそれ以前にはなかった、前向きな推進力を与えることになることは、ほぼ間違いのないことと言ってよいであろう。

また、昨年度の調査にはなく、本年度の調査ではじめて現われてきた事項は、すべて各校特有のものであり、各校に共通のものは一つもないこと、および、それが現われてきている調査型式はすべて㊶型式である点も注目したい。これは、本年度の計画の第(2)項もまた予想に違わなかったことを裏づけることになると言える。

なお、調査としては勿論「誇りをもてない」者の分析も行っており、研究協議会における口頭発表では、それについても報告したが、ここには限られた紙数の関係で、掲載できないことを残念に思う。しかし、この分析結果についても、上記と全く同様のことが、すべて認められ、これは、たとえ「誇りをもてない」としても、ただ何となくとか、感情的にはなく、鋭く、分析的に、その根拠を確認させるはたらきを期待しうる意味で、㊷型式による調査は、やはり効果的と言いうることを申しそえておきたい。

おわりに、「誇り」および「伝統」の定義の調査については、明年度の㊷型式調査には是非加えるべきだと考えられるような、各校それぞれ独自の表現が、主として㊶型式調査によって得られたので、次にそれを列挙しておく。末尾の数字は、それを記載していた生徒の実数である。

「誇り」とは？

- ㊶ 型式によるもの。
 - 本校 { 学校の名を傷つけぬよう常に心がけているところに自然に生じてくるもの。(6)
 - 校 { 単に生徒としてではなく、人間として恥づかしくない行動がとれること。(1)
 - 校 { 学校の仲間への愛から生じてくるもの。(1)
 - B { 人はどうであろうとも自分が理解している学校のよき。(7)
 - 校 { 主体的に行動し、よい環境を作り出すために感じる責任感。(1)
 - C { 学校生活の充実感から生じたもの。(4)
 - 校 { よく勉強し、立派な人になること。(2)
 - 校 { 先生と生徒の心が一つになっている所に生まれるもの。(1)
 - 校 { 先輩の作り上げた風潮が、すばらしいと思えるとき感じるもの。(1)
 - ㊷ 型式によるもの。
 - C { 生き甲斐を感じる学校生活をしているとき、生まれられるもの。

「伝統」とは？

- ㊶ 型式によるもの。
 - B { どんな横道にそれでも「そうあるべきだ」と感じさせるような校内に存在する空気 (3)
 - 校 { 先輩によって作られた学校としての行動のメカニズム。(4)
 - C { 卒業生の社会に於ける活躍の態度 (3)
 - 校 { 伝承された創立時代の理想 (1)
 - 校 { 独自の校風を作り上げようとする気持自体(1)
 - 校 { 単なる過去の出来事 (1)
 - 校 { 名誉を守るために、先生が振りまわすもの。(1)
 - ㊷ 型式によるもの。
 - 本校 { 生徒の心に宿り、これを高めるもの。(2)
 - 校 { 他校との比較から生じた優越感の蓄積。(1)
 - C { 各世代の人達が、最上のものを求めて努力する所に自然に生まれるもの。(1)

(戸畑 進・原田秀雄)